

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 143



前回から、表紙画を佐々木瑞穂さんをお願いしている。それは、坊守・武田美輪が生前に、「自分が亡くなった後、『よびごえ』の表紙画をお願いしますね」と約束していたからだ。しかし、考えてみると、「絵」とは何なのか。「絵」など分かりきっているとと思われるが、改めて考えると不思議だ。景色や静物は、画家が目の前にしているものだ。それはいわば「ひかり」の世界だ。しかし、その「ひかり」を絵の具という「色」に変換しカンバスに描く。どうして「ひかり」を「色」に変えることができるのか。それは本当は不可能なはずだ。しかし、画家はそれをやり遂げる。リズムを追求した絵など、まるで写真のようだ。しかし、写真に似ていても、それは写真ではなく、人間が絵筆を駆使して描いた絵なのだ。この「ひかり」を「色」の世界に変換するという、いわば不可能を可能にする営みこそ絵画の醍醐味ではなからうか。ふと、わが身に目が行けば、「宗教」もそうだ。阿弥陀さんという「ひかり」を、眼に見える「言葉」に変換する。画家は、何のために絵を描くのかは分からないはずだ。「宗教」も同じだ。何のために「ひかり」を「言葉」に変えるのか。それが分からないから、永遠に継続できる愉しみが与えられるのだろう。

坊守が亡くなり はや二三月

武田 釋定光（住持職）

■〈未知なる存在〉■

昨年、二〇二五（令和七年）十一月一日に、坊守（俗名・武田美輪・法名・定光院釋尼芳輪）が、六十六年という人生を終え、この娑婆から浄土へと還ってゆきました。（「坊守」とは、住職の伴侶のこと、つまり、「女房」です）

十一月十一日にお葬式を済ませ、十二月十六日に四十九日納骨法要も済ませました。あれから、はや三月が過ぎようとしています。

あつという間に三ヶ月が過ぎたように思えますし、もう何十年も前のことのようにも思えます。いまから振り返りますと、連れ合いとの結婚生活とは、いったい何だったのかと、改めて考えさせられています。

現代は、スマホがありますから、簡単に写真や動画を見ることができます。写真や動画の中にいる彼女は、確かに存在していたのです。手で触れることも、言葉を交わすこともできました。

しかし、いまは、その存在はありません。火葬場で荼毘に付し、白骨となった彼女と対面しましたが、直感的に、「これは彼女ではない」と感じました。これは彼女の抜け殻であって、彼女自身

ではないと思っただのです。

それでは、「本当の彼女」とは何だったのかと、問い始めたのです。そういえば、いま思い出したことがあります。それは結婚して何年も経った或る日、私はもう彼女のことは分かったつもりになっていたのです。ところが、彼女は、それを否定したのです。「私のことを全部分かっているとでも思っているの!？」と。私は、その言葉を聞いてギクツとしました。「お前に私の何が分かっているのか。少しも分かっているまいだろう。分かってもないのに、分かっているような顔をするな」と聞こえたのです。

結婚生活を長年続けていると、ついつい相手のことを分かってしまうのです。でも、本当は、「分かっている」のではなく、「分かったつもりになっている」だけなのです。

それから、私は改めて彼女の存在を、「未知なる存在」として受け止め直したのです。それからは、自分自身に「彼女を分かっていると思っはならない。つねに〈未知なる存在〉として刮目して見るべし」と言い聞かせてきました。

■「思い出」しか彼女と出会う場所はない■

しかし、これから私は、存在がなくなった彼女と、どのように付き合えばよいのでしょうか。私がどのように思おうとも、もう彼女はこの世に存在していません。そうになると、私と彼女との関係は、「思い出」という記憶を介して付き合うより他ありません。

治療中は寿命の先が読めなかったので、できるだけ「思い出」を作るために旅行にも出かけました。旅先の景色を背景に、写真を何枚も撮りました。その中の彼女を見ては、懐かしいと同時に寂しさも感じました。もう二度と会うことはできないのですから。

寂しさを感じているときは、必ず「思い出」に浸っているときでした。でも、私にも生活があるので、そうそう「思い出」に浸りきっていることもできません。そうすると、彼女を忘れているときには、寂しさがやって来ないので。ふと、「思い出す」と、そこに寂しさが表われます。

■悲しみは貪欲の悲鳴なり■

そして、この寂しさとは、いったいどこからやって来るのだろうかと考えました。そしてとうとう、それは、「自我愛（貪欲）」だと分かったのです。自分は「私を愛してくれるもの」のみを愛するのです。その「私を愛してくれる存在」である彼女がいなくなったので悲しいのです。だから、私を愛してくれない存在がいなくなっても、何の感情も起きません。

テレビで芸能人の死が報じられても、さほどの悲しみは感じません。それは自分と愛の関係がないからです。人間は、自分を愛してくれた者のみに感情をはたらかせます。つまり、「貪欲」という自我愛が根底にあって、悲しみが生まれるのです。

このカラクリに気づいてしまっただけなら、彼女を悲しむことは、彼女を冒瀆することではないかと感ずるようになりました。お気に入りのオモチャを取り上げられて泣いている赤ちゃんと変わりません。彼女をオモチャにしていたことの罪を思わされました。

こうなると、ますます、彼女との関係は曖昧になります。もともと、彼女のことはまったく分かっていなかったのではないかとさえ思えました。「貪欲」とは、彼女を分かったことにし、自分のお気に入りの彼女として仕立てる煩惱だったのです。

とうとう、彼女と付き合う前から、そして付き合っていたとき

も、さらに彼女と別れたいまを含めて、一切合切、彼女のことは分かっていなかったのだと気づきました。

つまり、私は、最初から〈未知なる存在〉と付き合いってきたのです。そして、この〈未知なる存在〉を、仮に「観音菩薩」と呼ぶことにしました。この「観音菩薩」が私と縁を結んで下さり、四十六年間もお世話を頂き、お浄土へ還っていったのでした。

■人間には海面と深海がある■

現在は、確かに寂しさもありますが、それが私全体を覆い尽くし、「寂しくてご飯も食べられない」というほどでもありません。「寂しさ」は私の一部分ではあるけれども、それが生活全体を覆うことはないのです。

変な例えですが、「寂しさ」は大海原の海面を揺さぶる波のようです。しかし、そこから何百メートルも潜った深海の自己もあるのです。深海の自己は、「寂しさ」という表層の感情には左右されません。だから「非感情」なのです。人間のこころは、こんな構造になっているのだと教えられました。

■〈真・宗〉は「死なない」宗教■

私は、以前から、このように語っています。生きている人間は、決して「一人称の死」を体験することはできません。つまり、「観念としての死」しか知らないのです。このように人間を「死の観念」から解放するのが〈真・宗〉です。それでは、「死」の反対にある「生きる」とはどういうことなのでしょう。実は、「死」が観念であれば、「生」も観念です。そうやって「生死」を超えさせ、つねに「新鮮な」、つまり、〈未知〉なる「いま・ここ・私」を与え続けるのが〈真・宗〉という運動だったのです。

「仏法聞き難し」(その2)

加藤 伸吾 (神奈川県川崎市・

東京真宗同朋の会)

前回の拙文の続きに入る前にまず、先日ご還浄げんじょうされた坊守様のことに付き、一言述べるのをどうしても、どうしてもお許しいただきたい。

私がブッディサロンや真宗会館主催の秋葉原親鸞講座でご住職の法話を直にお聴聞するようになったのは実は去年に過ぎず、坊守様とお話しする機会があったのもほんの数回であった。

しかし、その少ない機会で私のハートは坊守様にわしづかみにされてしまったのであった。

というのも、最初お話ししたのはブッディサロン、その次は秋葉原で講座後の飲み会の席だったのだが、飲み会で私はちよっと緊張していた。大人数の席がかなり苦手だからである。どこに座っていいものやら…と内心オロオロしながら着席すると、近くに座っていらした坊守様が、私に凜とした微笑みを向けながら、お声がけくださったのだった。「この間、来てくださった加藤さんね、はい」と。

たった、それだけ。

その後も、ちゃんと言葉を交わしたことは、ほとんどなかったと思う。しかし、名前を認知されることは、存在そのものの認知

で、関係の第一歩である。

私が世の生業の大学教員として授業を担当する際、特に、コミュニケーションツールであり、人間が人間たる証でもある言語(私の場合は第二外国語としてのスペイン語)に関わる授業では、私の最初の仕事は全員の顔と名前をなるべく迅速に一致させることである。人は、自分の存在が認知されている場所でしか、地に足をつけて安全を感じつつ行動することができない。そして、あらゆる言語を通じた世界の認識で最も重要なのが「名詞」、つまり名前である。

それが理屈ではなく身にしみて分かっているからこそ、私はあの飲み会で坊守様にお声がけいただいたことで、その後も多少は緊張しながらもその場に居続け、またブッディにも安心して参加することができるようになったのだった。

そんな名前の重要性を、坊守様はよくよくご存じだったのでと思う。それが長年のお聴聞と坊守としてのご経験からきているのか、それとも、人間関係のいわば「天才」なのか、断言することはもちろんできないのだが、私にはその前者だけではどうもないように思えてならない。

要は、嬉しかった。名前を呼んで存在を認知してもらうことほど、嬉しいことはない。

だから、大幅に遅刻しつつもなんとかお通夜に参列させていただき、どうしてもお顔だけは拝見しておきたかったのだが、ご住職のご厚意でそれが叶ったとき、もう悲しいとしかいようがない感情で胸が満たされる他はなかった。ブッディ他色々な場で法友としてお付き合いいただいている僧侶の長谷川綾子さんがその

場にいらしたので、墨袈裟すみかげさに思わず抱きついて泣いてしまったのだった（長谷川さんごめんなさい…）。自分の存在を認知してくられた存在が、この世から消えてしまったような気がするの、泣く以外にどのようなリアクションが可能だというのか。

その後はすぐ、いつもの錦糸町駅行きのバスに乗って帰った。

せっかく名前を覚えてくれていたのに。これからいろんな話ができるかなと思っていたのに。という思いが道すがら頭の中をぐるぐると、当然かけめぐるわけである。しかししばらくして、ちょうど錦糸町に着いた頃だったか、思い出したことがある。

コーサラ国王妃ウツビリーが娘ジューヴァンティを失い、娘が茶毘に付された場所で娘の名を「ジューヴァー！ジューヴァー！」と呼びながら泣き叫ぶ逸話。嘆き悲しむウツビリーに釈尊はなんと声をかけたか。

母よ。そなたは、「ジューヴァーよ！」といって、林の中で叫ぶ。：ジューヴァーという名の8万4千人の娘が、この火葬場で茶毘に付せられたが、それらのうちのだれを、そなたは悼むのか？： 自己を知れ。（『尼僧の告白 テーリーガーター』（岩波文庫）p. 19）

そこでウツビリーははたと気づき、釈尊に帰依していくことになる。何に気づいたか。8万4千のジューヴァーの死があれば、そこに8万4千の母親の悲しみがあること。そうとも知らずに、8万4千人のジューヴァー（いのち、という意味だそうである）の中から、自分の娘だけに執着していたこと。

さらに連想して思い出したことがあった。東大寺大勧進だいかんじん職しやくにあり中世日本の宗教行政の中心にもあった俊乗房重源上人しゆんじやうぼうちゆうげんしやうにん（1197-1266）が、大原問答おおはらもんどうと呼ばれる相論さうろん（1188年）で法然上人のご勸化を受けて、翌日から自らを「南無阿弥陀仏」と名乗るようになったこと。

そして、『阿弥陀経』でのお浄土、特にお浄土にいる鳥たちのくだり。

無三悪趣むさんあくしゆ。舍利弗しゃりほつ。其仏国土ごぶつこくど。尚無三悪道之名しやうむさんあくしゆしみやう。何況有実がきやううじつ。是諸衆鳥ぜしよしゆちやう。

（三悪趣無ければなり。舍利弗。其の仏国土には、尚三悪道の名無し。何に況んや、実に是の諸の衆鳥有らんや。）

（『真宗聖典（第二版）』p. 138。強調筆者）
地獄・餓鬼・畜生の三悪道すら、お浄土にはその名前がないから、その実態もない。

先ほど「名前の認知は存在の認知」といったが、それは娑婆しゃはの話で、例えば私・加藤伸吾の名前の認知は、娑婆での加藤伸吾という「私」、「我」の認知をしてもらったに過ぎない。私の本当の名前は「南無阿弥陀仏」でしかないのに。世界は名前以前に存在していて、その世界に名前をつけるとしたら「阿弥陀」でしかないのに。

私の名前を覚えてくれていて、呼んでくださった坊守様。それに無邪気に喜んでいて、そしてそんな坊守様のご還浄えんじやうに際しては、あの時無邪気に喜んでいたその分だけピツタリ、翻ひんして悲しんでいたわたくし、加藤伸吾。一人称単数。「我」。

…このことにウツビリーよろしく「はたと気づいて」、その後加藤は全てを打ち捨てて、ますますお聴聞に励むようになりましたとき、お・し・ま・い…といけば話としてはきれいにまとまるのかもしれないが、もちろんそうもいかない。お聴聞しなくなつたわけではもちろんないのだが、坊守様のお顔を最後に拝見してからしばらく、私といえは相も変わらずブツデイしかりその他のご法座しかり、なんやかんやと他の用事があれば、それにかこつけて行かないではないか。ご法座にはいけなかつたとしても、ご住職曰く「毎日が誕生日」なのだから、日々刻々を生きている中に阿弥陀さんのよびごえが聞こえ、そのたび「縁を生きる」(同じく先日ご還浄された池田勇諦師の言葉)存在である自(みずか)らの分限を全うさせていたかどうかと、自(おのず)からそう思えればよいのだが、それも甚だ心許ない。

「仏法聞き難し」。

してみれば、こうして理屈や名利心みょうりしんを手元でこねこねしながらぐずぐずいつているのが娑婆のわたくし、齢は四十九、職業は凡夫の加藤伸吾である、だからお念仏しなさいね!と仰せなのが、あのお棺の中で小さくなつてしまつた坊守様の、仏としてのお姿なのだなと思えないわけである。

悲しい。

しかし、生前にご縁をいただいて、今こうしてご勸化を受けられてあることは、しみじみと確かに、嬉しい。

合掌 南無阿弥陀佛

■加藤さんには、前回「仏法聞き難し(その1)」に引き続き、「(その2)」をお願いしていたのだが、やはり、坊守の「死」に

引きずられた文章になられたそうだ。それほど、「坊守」の存在が、いや「武田美輪」という唯一無二の存在が大きかつたのだらうと思わされます。これは前にも書きましたが、どうしても、私の知っている「武田美輪」は、「武田美輪」の1%でしかないので、たとえ四十六年間付き合ってきたとしてもです。ですから、九十九%は分からないままなのです。分からない存在を、あたかも分かつたかの如くにしていたことが罪だと知らされます。牽強付会けんきょうふかいですが、おそらく親鸞聖人も、私と同じようにお連れ合いを感じていたのではないでしょうか。聖人が二十九歳のときに見た夢には、救世観音くせかんのんが現れ、こう語ります。

「行者よ、宿世しゆくせの報いによつて女犯にょぼん(結婚生活)するなら、私は玉女ぎょくにょ(美女)となつて貴方に犯されよう。そして一生の間、貴方をもり立て生活した後、この世を去るときには極楽ごくらくに生まれさせてあげましょう」

聖人にとつては、お連れ合いが「観音菩薩」だったのでしよう。「女犯」とは、単に性的な意味を遙かに超えています。単純に言えば、伴侶と一緒になることで、しなくてもよい苦勞を相手に負わせることです。つまり、結婚とは、相手の運命を変えてしまうという罪を犯すことなのです。聖人は、お連れ合いに対して、「罪なる者」という意識で関わつていたことでしょう。だからといって、お連れ合いに対して、いつも懺悔ざんげしていたわけでもなく、やはり、凡夫ぼんぷですから、傲慢ごうまんに振る舞いもしたことでしょう。しかし、その度に、原点に戻されたのだと思います。連れ合いは「観音菩薩」だつたという。「連れ合いは、お前が知っている『人間』でなく、〈未知なる存在〉であり、それを汚しているんだぞ」と。住職

★因速寺 掲示板★

永代経法要

— 人間を考える集い —
兼ご命日の集い

門徒・檀家の有
る無し不問です

5月31日(日)午後1時〜(受付 午後12時30分)

冥加志：お一人三千元

勤行十法話十落語(古今亭菊志ん師匠)

永代経とは永代に渡って私にまでお念仏を伝えて下さった先祖を
偲び、また私から永代に渡って伝わっていくお念仏の教えを想う
集いです。今年も法話の後の余興として、落語があります。どなた
さまざまお気軽にご参加ください。

◆写経の会◆

毎月1回 午後1時30分〜4時頃まで

開催日：3月11日(水) 4月8日(水)

5月13日(水) 6月10日(水)

教材：正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経(上下巻)

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)をします。
お菓子とお茶を飲みながら座談をする会です。写経のみの参加でも
構いません。非日常を味わってみませんか?
どなたでも参加可能です。

冥加志：初回は三千元(教材費込)

二回目以降五百円



門徒・檀家で有
る無し不問です

(お勤め+座談含む)

◇フツデイ・サロン◇

〔輪読会〕

門徒・檀家で有
る無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、
語り合う会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、
なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこ
に流れている「ほんとう」に触れるのが会の趣旨です。
どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

●上半期の開催日 午後四時スタート

●冥加志：お一人千円 ※遅刻・早退自由です♪

●日程：3月29日(日) 4月26日(日)

5月はお休み 6月28日(日)



◇ご命日の集い◇

門徒・檀家で有
る無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。
やがて私自身も、この世を去っていきます。
みすみす死ぬのになぜ生きるのか?
人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか?

開催日：4月26日(日) 午後2時〜

5月31日(日) 兼 永代経 午後1時〜

内容：読経(焼香)+法話(住職)

冥加志：冥加志は各会で異なりますので詳細は後日



New!
住職新刊本発売



『< 真実 > のデッサン 10』
実費冥加金 500円

◆ 秋葉原親鸞講座 ◆

テーマ：『歎異抄』で生死を超える

秋葉原最終回

第四回 4月15日(水) 午後7時～8時30分

1回千円 全4回

会場：秋葉原UDXギャラリーネクスト

東京都千代田区外神田4丁目14の1

秋葉原UDX4階

問い合わせ先・真宗会館TEL 03 (5393) 0810

歎異抄

◆ 六組間法会 ◆

テーマ：『教えを求めて』

講師 花園一実師 午後2時～5時 冥加志：千円

第二回 2026年3月14日(土) 会場：因速寺

仏法を聴いて自分の生き方を考えてみませんか？

雑言雑語

前回の続きにはなるが、「人生に行き詰まり」を感じたのは、交通事故で人が亡くなったという事実を突き付けられた時だった。「なぜ自分は生きているのだろうか」そんな事は考えもしなかった。留置所での日々は事故を起こした自分をずっと責める毎日だった。面会謝絶が五日経った日、両親が面会に来た。それは今まで見てきた両親とは違った顔をしていた。私は顔を直視することができないまま俯いていた。母は私の顔を見るなり涙を流していた。父は、自分の父親(前住職)が亡くなった時にも見せることの無かった涙顔で私に語り続けた。「お前はマクロみたいな奴だから、マクロは泳ぐ事を止めてしまうと死んでしまう。今のお前は止まりかけていることだろう。だから泳ぎ続ける」と行き詰まりを察してくれた言葉だった。そして「今までが全てじゃない。これからがお前の人生を決めるんだ」と、励ましてくれたのだ。五日間も面会に来なかつた両親に流石に見捨てられたと思いついていた自分を恥じた。散々な親不孝を繰り返してきたのに、両親は見捨てる事が無かった。十五分の面会時間が迫り、父は亡くなった人へと三部経を拝読し、歎異抄を読むようにと差し入れをしてくれた。「人生に困ったら専修学院に行け」と血の繋がらない兄貴に言われた事を思い出して、「今がその時だ」と思いついた。取り調べも一か月程になった頃、いきなり「釈放!」と留置所の門が開かれた。出所してからの日々は涙の毎日だった。特に父と一緒に法事に出た際、法話を聴くのが辛かった。話している事が全て自分に語られているかの如く私には突き刺さった。専修学院に入学してから、竹中智秀学院長に抱き締められ、自分が背負ってきた業を竹中院長が背負ってくれたかのように感じた。それから仏法の世界に身を浸していったが、ある時、自分を苦しめていたのは自分自身だったと気付かされた。仏法の鏡に映したら自分で自分の首を絞めていたのだ。これはある目覚めだと思ふ。本当は見たくもない本当の自分が照らし出されたのだ。仏法は目覚まし時計の様に、目が覚めるまでずっと鳴り続けていたのだ。目が覚めてみるとそれは十劫も昔から、私ひとりの為に阿弥陀という光になり、目を覚ますまで鳴り続けていたのだ。母はそんな私をずっと待っていたのかもしれない。釋定志

表紙画題

『パンビー』

佐々木瑞穂さん



『ぶどういし』一四三頁

発行所 因速寺(真宗大谷派 本山 東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1-4-10

TEL (03) 3644-0986 FAX (03) 3648-4391

Email info@insokuji.com

HP https://insokuji.com

編集／発行 武田 定光 Takeda Jyoutoku
発行日 二〇二六(令和八)年三月十四日

Copyright 2026 INSOKU-JI Printed in Japan